

甲州道中と佐久往還が交差し、年貢米を運ぶ舟着き場もあった葦崎宿。人・もの・情報が盛んに行き交うこの場所で、商人たちは多くの人と交流し、情報を集めて生き抜きました。

金六と一三が商売の現場を肌で感じながら育ったことは、「自分で判断し、自分の力で行動する」という生き方につながりました。

「人・もの・情報」が行き交う町

大実業家を育んだのは

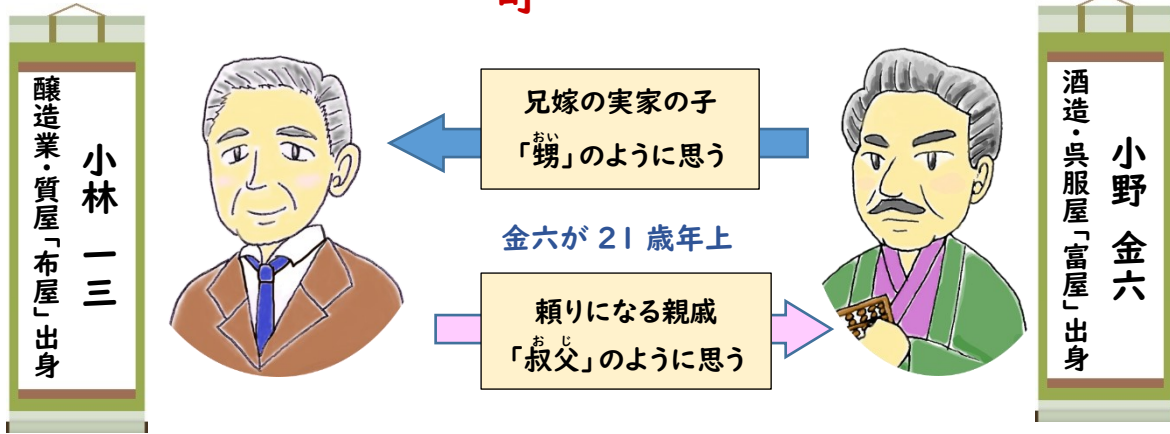
令和5年(2023)は、小野金六の没後100年と小林一三の生誕150年が重なります。

二人は共に甲州道中の葦崎宿(今の葦崎市本町)の裕福な商家に生まれ、後に東京や大阪で実業家として成功を収めました。

小野金六はJR身延線の前身となった富士身延鉄道の初代社長を務め、小林一三は阪急電鉄を創業しました。

令和5年(2023)は金六と一三の記念イヤー

鉄道事業で名を遺した二人実はご近所同士で親戚だった



金六の生家「富屋」の蔵座敷 (葦崎市民俗資料館に移築)

金六の兄嫁は、一三が育った布屋から嫁いできており、金六と一三は親戚関係にありました。

実際には甥ではありませんが、金六は一三を「自分の甥」だと人に紹介しています。

“甥っ子のように思う才能ある若者”

“叔父さんのような同郷の親戚”

そう思う間柄でした。家族ぐるみで食事を楽しんだり、仕事で助け合うこともありました。

